

8609 國際人になるということがどんなに大変なことか・・・

國際人になるということがどんなに大変なことか、三年ばかりニューヨークに暮らした私にはよくわかる。

私の言う國際人というのは、なにも世界を股にかけて縦横無尽に大活躍する人だけを指しているのではない。どんな国のどんな土俵に上がっても、自分の特質や国民性を失わずにその国の人たちと交流を持てる人はすべて、國際人と言えると私は思う。

これは容易そうでそうでもない。相手の国に関する理解の探さや、交流の手段として使う語学力も重要なポイントだし、自分自身を把握することも大切である。そのうえ表現力やエンタテナーとしての資質も要求されるだろうからこれは大変なことである。

神津 カンナ：会えてうれしい花いちもんめ

[許容訳例]

I know what hard work it is to become an “internationally minded person,” because I once lived in New York for about three years.

By “internationally minded person” I don’t mean only the man who plays a very active part in the world. Whatever setting in whatever country he may find himself in, if he can associate with the people there without losing his identity and his nationality, one can call him, I feel, truly internationally minded.

This seems easy, but actually is not. A deep understanding of the other country and proficiency in languages as a means of communication are essential here, and it is important to understand oneself, too. In addition, the ability to express oneself clearly and entertainingly will probably be needed, so that to become “internationally minded” is not to an easy task at all.

[翻訳例]

Having once lived for three years or so in New York, I know very well how difficult it is to become an “internationally minded person.”

By “internationally minded person” I don’t mean only the kind of energetic person whose activities take him to every corner of the globe. The term, I feel, can be applied to anybody who manages, in whatever field of activity in whatever country he finds himself, to associate with the people of that country without losing his own individual or national identity.

To do this may seem easy, but is not so in fact. It depends very much on one’s understanding of the other country and on one’s ability with the language use in communication, and it is equally important to have clear idea of one’s own nature, too. In addition, one will probably also need an ability to express oneself clearly and entertainingly—all of which is a far from easy matter.

■国際人になるどういことがどんなに大変なことか、三年ばかりニューヨークに暮らした私にはよくわかる。(8609)

★「国際人」に相当する英語の表現はありません。international man [person]という言葉は使わないので。Cosmopolitanという言葉がありますが、これは「いろいろな国を旅行し、経験を持ち、各国の事情に通じている人」のこと、ここでは使えません。ここで言いたいのは「国際感覚を持った人」くらいの意味ですから internationally minded person と言うしかないでしょう。

★「～になるということ」は to be ~でもよいのですが、この「国際人になる」というのは「特に意識的にそうなること」ですから to become ~がいいでしょう。

★「三年ばかり」は for about [around] three years; for three years or so でしょう。

●「連体修飾節+特定体言」(三年ばかりニューヨークに暮らした私)

「三年ばかりニューヨークに暮らした私」は「連体修飾節(三年ばかりニューヨークに暮らした) + 特定体言(私)」ですが、特定体言(私)なので、I who…と関係代名詞を制限的に使って訳すことは出来ません。I who…とすると「三年ばかりニューヨークに暮らした私」と「そうでない私」の存在を認めることになってしまいます。三年ばかりニューヨークに暮らした」と「私は…」のイメージの順序を壊さずに訳すと「分詞構文+主語」(Having once lived …, I …)の形にすることになります。なお、having + p.p.は時間の差を明確にするため「経験」を表すためではありません。それから、イメージの順序を守らないでいいとするなら「ニューヨークで暮らした…」は…, because [since] I once lived [spent] in New York for about three years と処理することも出来ます。ついでですが、「住んだことがある」という経験をあらわす積もりで I have lived in New York for three years とすると「ニューヨークに三年前から住んでいる」、つまり I have been living in New York for three years と言うのと同じになってしまいます。

★「…になるということがどんなに大変であるか」は how hard [difficult] it is to …ですが、ここは「どんなに大変なことであるか」と言い換えることが出来ます。その場合は what hard [difficult] work it is to…となります。

★「私にはよくわかる」は「私はよく知っている」ということで I know very well…です。

■私の言う国際人というのは、なにも世界を股にかけて縦横無尽に大活躍する人だけを指しているのではない。(8609)

★「私の言う国際人というのは～を指しているのではない」は「～の言う A (と) は B のことである」(~ mean B by A)の構文で書くことが出来ます。ここは主語が I で否定文ですから By A I don't mean B ですが、この By ~の代わりに When I say ~を使っても構いません。

★「なにも(…ない)」は否定を強調する言葉なので、無視していいと思います。

★「世界を股に掛けて」は all over the world [globe]とか in every corner of the globe など。

★「縦横無尽に大活躍する」は be very active くらい。「縦横無尽に」は辞書には freely と出

ていますが、ここでは「大～」と重ねて「活躍する」を大げさに強調しているに過ぎません。very くらいでいいのではないかと思われます。なお、play a very active part in…という表現も考えられますが、play a … part というと、「何かの組織・団体の中で自分が責任をもっている部分で活躍する」というニュアンスで、ここではちょっとずれます。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(世界を股にかけて縦横無尽に大活躍する人)

「世界を股にかけて縦横無尽に大活躍する人だけ」は「連体修飾節(世界を股にかけて縦横無尽に大活躍する)+不定代名詞的体言(人)」ですから、英語では「名詞(only the man [person])+関係詞節(who is very active all over the world [globe])となります。なお、もう少し上等で自然な英語にすると(I don't mean) only the kind of energetic person whose activities take him to every corner of the globe でしょう。

■ どんな国のどんな土俵に上がっても、自分の特質や国民性を失わずにその国の人たちと交流を持てる人はすべて、国際人と言えると私は思う。(8609)

★ 「どんな国の」は in whatever country ですが、日本文には「行く先々の(どんな国)というニュアンスが隠されていると感じられるので in whatever country he finds [may find] himself とします。この find oneself というのは happen to be (ふと気がつくと～にいた)ということです。

★ 「どんな土俵に上がっても」とは「どんな活躍の場にいても」ということでしょうから in whatever field of activity です。なお、field of activity の代わりに setting という言葉も使えると思います。あるいは、at を頭に持ってきて At whatever spot in whatever country he may find himself でもかまいません。なお、scene は、ここではちょっと曖昧で使えないと思います。

★ 「自分の特質や国民性を失わずに」の「自分の特質を失わずに」とは「自分自身であること(identity)を失わずに」に近いし、「国民性を失わずに」は「国民単位としての自分の特質(nationality)を失わずに」ということですから without losing his identity or [and] his nationalityとか、without losing his own individual or [and] national identityとかです。

● 「連体修飾節+不定代名詞的体言」(その国の人たちと交流を持てる人)

「その国の人たちと交流を持てる人」は「その国の人たちと交際する[つき合う]ことの出来る人」ということです。ここは「連体修飾節(その国の人たちと交流を持てる)+不定代名詞的体言(人)」ですから、英語では「不定代名詞(anyone)+関係詞節(who manages to associate with the people of that country)」となりますが・・・(次の●を参照)。

● 「限定形容詞(連体修飾節)+主語(不定代名詞的体言)+副助詞〔は〕」(その国の人たちと交流を持てる人〔は〕)

「・・・人〔は〕すべて、国際人と言えると私は思う」の副助詞〔は〕は「他と区別・強調」場合に使うので、たとえば、「彼〔は〕出来る」ということは「彼〔なら〕出来る」と言い換えてもいいと思われます、したがって、「・・・人〔は〕、国際人と言えると私は思う」は、言い換えると「・・・人〔なら〕、国際人と言えると私は思う」ということなので、英

語では if…で訳すことも出来ます。つまり, if he manages to associate with the people of that country とか, 簡単に if he can associate with people there とかで処理することも出来るということです。

★「国際人と言えると私は思う」は「～を国際人と呼ぶことが出来ると私は思う」と考えててもよいし、「その言葉(=国際人という言葉)は・・・な人にあてはめると私が思う」と考えてもいいでしょう。前者なら I think [feel] one can call ~…ですし, 後者なら The term, I feel, can be applied to ~となります。

■これは容易そうでそうでもない。 (8609)

★「これは容易そうでそうでもない」は「これは容易に思えるかもしれないが, 実はそうでない」と補って考えることが出来ます。 This may seem (to be) easy, but actually is not あるいは To do this may seem (to be) easy, but is not so in fact. となります。他には seem の代わりに seemingly を使って This is seemingly easy, but…とか, あるいは, ちょっと堅いというか文学的な表現になりますが, Seemingly easy, this is not so in fact. とも言えます。この場合の Seemingly easy いうのは this に懸かっていて This thing, which seems to be easy, is not so in fact. という意味になります。

■相手の国に関する理解の探さや, 交流の手段として使う語学力も重要なポイントだし, 自分自身を把握することも大切である。 (8609)

★「相手の国に関する理解の深さ」は「相手の国に対する深い理解」と考えて a deep understanding of the other country [countries] とするか, the depth of one's understanding of the other country [countries] です。こここの「理解」に appreciation とか comprehension を使うのは不適切です。 appreciation は「単に理解するだけでなく, 本当の意味・価値を正しく理解し評価する」というニュアンスを含みます。たとえば, I appreciate your kindness. (あなたのご親切 (な気持ちがよくわかり) 感謝します) とか, I can't [don't] appreciate music. と言えば, ‘音楽がわからない [に興味がない]’, つまり‘音楽を聴いても真の意味, 価値が理解できない’ということになります。ところが, ここで言う「相手の国に対する理解」はそれほど深い意味はないと思われるからです。後者の comprehension は, もう少し具本的な対象の場合に使う言葉です。

★「交流の手段として使う語学力」は a proficiency in language as a means of communication とか, one's ability with the language used in communication とか, あるいは, one's linguistic ability as a means to communication でしょう。ここで a means of ではなく a means to とするのは ability to communicate (<able to communicate>), つまり, 動詞性を強く伝えたいからです。

★「重要なポイントだ」は単に「重要だ」とか「必要だ」と言っているのではなく, それがないと, 目的が達成されないかもしれないという意味で, 「～にかかっている・～次第である」という感じだと思います。したがって, are essential でも間違いとはいえませんが, It depends very much on ~ の方がいいでしょう。

★ 「自分自身を把握する」は簡単に to understand oneself でもいいですが、 to have a clear idea [to have a firm grasp] of one's own nature ぐらいに書くといいです。なお、 to catch oneself は、ここでは使えません。 catch は、たとえば、 I didn't catch what you said [the joke]. のように「流動的なものを瞬間的に理解する」という意味で使うものです。

★ 「・・・も」は equally とか also; too などで処理します。

★ 「大切である」は is very important でしょう。

● 「A [や] B [も]・・・だ [し], C [も]・・・だ」(等価並列)

「相手の国に関する理解の探さ [や]、交流の手段として使う語学力 [も] 重要なポイントだ [し]、自分自身を把握すること [も] 大切である」は情報を等価的に並列しているので and を使って結ぶことになりますが、 A と B とは近接関係であるのに対して C は追叙的ですから A and B, and C とした方がいいと思われます。

■ そのうえ表現力やエンタテナーとしての資質も要求されるだろうからこれは大変なことである。(8609)

★ 「そのうえ」は単に besides とするのではなく、 Besides all this にするか、 In addition がいいです。

★ 「表現力」は、平面的に訳すと one's power(s) of expression ですが、すぐ前の「自分自身を把握すること」と対応的に「自分自身を表現する力」と考える方がいいと思われますから an ability to express oneself clearly を使うか、 (it is equally important) to have clear idea of one's own nature とするのがちょっとハイブローの英語です。

★ 「エンタテナーとしての資質」は前の clearly と同等にして (clearly and) entertainingly とすると「(表現) 力」と「資質」を an ability 一語にまとめることができます。なお、「エンタテナー」を entertainer とすると、いわゆる「芸能人」という意味になってしまいます。ここで言う「エンタテナーとしての」というのは「人を退屈させない」ということです。

★ 「要求される」は主語によって、つまり、物主語なら be needed であり、人主語なら will probably also need です。

● 「から」(要求されるだろうから)

「要求されるだろう [から]」は、ここでは…, so ではなく…, so that…を用います。これは非常に微妙な問題になりますが、 so というのは、たとえば、 He was not there, so we came home again. のように、単純に「…だったから、…した」という感じになります。それに対して、 so that は前半の結果として生じた新しい状態を示す場合に使います。つまり、単に因果関係を示すというより、結果にウエイトがかかってくるのです。

★ 「これは大変なことである」は、 to become “internationally minded” is not to an easy task at all と繰り返してもいいですが、すぐ前のこと全体を受けて all of which is a far from easy matter [task] [is not an easy task at all] とする方が日本文と合います。